

# ニホンザルとの出会いにおける動物観の比較民俗学的考察

—白山山麓と琵琶湖周辺の比較をめぐって—

広瀬 鎮・水野 礼子 日本モンキーセンター

## ON THE FEELINGS OF PEOPLE AT THE TIME OF ENCOUNTER FOR WILD JAPANESE MONKEY IN HAKUSAN : COMPARATIVE ETHNOLOGICAL RESERRCH ON MOKEY-LORE BETWEEN HAKUSAN AND THE LAKE BIWA DISTRICT

Shizumu HIROSE and Reiko MIZUNO, *Japan Monkey Centre*

### I はじめに 問題の提起

ニホンザルをめぐり、日本人の過去から現在にいたる特色ある動物観についての調査研究は、いまだに系統だっておこなわれていない。民俗研究者による、ニホンザルと民俗をめぐり断片的な伝承の集積や、動物民譚にみられるニホンザルの伝承は個別にあつめられ、近年、各地における民俗学研究誌等に報告されている(道下1971)。しかしながら、日本人が抱くニホンザルという動物に対する動物観を、地域社会に伝承されている現存する禁忌口承(タブー)との関連で、日本人の精神の歴史にひそむ動物観を自然環境の中の生きものとしてのニホンザルと関連して人文地誌的な背景を追求する研究は少なく、本論にのべるニホンザルをめぐりアニマルローア(動物民譚)の成立背景を歴史的に解明するために禁忌伝承の地域的比較を試みる調査研究は、他にみあたらないのである。本論は、以上の観点からニホンザルと日本人の出会いにおける地域住民の動物観の実態考察をアンケートおよび聞き込み調査により比較民俗学的に考察したものである。今回までの調査では、白山山麓に居住する住民にとってのニホンザルへの動物観にみられる一つの特色とみられる厳しい禁忌伝承が乏しく、かつまた憎悪観の遺存が想像以上に少ない点が、注目に値する(広瀬・水野1974)。

かつまた、神と仏が互いに闘争しあい牽制しあって関係した日本列島において、他の地区に、しばしば発見されるような神仏習合信仰に関連したニホンザルの伝承、たとえば山王信仰のサルや厩猿信仰のサルといった神使獣としての話題がきわめて乏しいこの地区において、特に石川県石川郡白峰地区、尾添・中宮地区の住民にとって、過去の伝統的出作り農耕におけるニホンザルとの農耕生産物をめぐっての両者の対立は、これまで顕著な事象であったとされながらも、今日のこされているニホンザルに関する禁忌伝承のごく一部をのぞき、現在同地区に生活している住民の間にはサルに対する強い侮蔑観も、嫌悪観も見当たらないのは、一体何故であろうか。確かに出作り生活体験者たちは、サルによる作害に絶望的な怒りと憎しみを覚えつつけたに違いない。事実そのようなサル退治やサルを防いだ口承も残っている(広瀬・水野1974)。ところが、こうした憎しみが永年にわたって伝えられるごとく、現在の人々のニホンザルへの動物観を成立せしめている事実も、注目されねばならないことな

のである。これは、我国における農林行政によるニホンザルの保護が、戦後の鳥獣保護政策を積極的に打出し、農林大臣の許可なくみだりにニホンザルを捕殺できなかったという事実や（広瀬1970）、ニホンザルの生息テリトリーと居住民の生活圏のかかわりあいの変化、また、ニホンザルの生活圏は人々の生活域をはるかにこえて広く存在しえたという事実、また同地区の人々の生活も産業経済の変化と共に近代化を迫られ出作りから森林関連業への転換従事、次に電力、道路、治山工事等へと労働形態の変化にせまられたことにも関連する。人々の生活もまた野生生物との出会いの場を失ない、かつての動物伝承も急速に忘れられるといった生活様式の変化など一連に関連しあっているものである（白峰村史）。今回の調査では、いまだ調査対象者からの十分なニホンザルとの出会いをめぐる体験報告資料をえていないのであるが、アンケートおよび聞き込み調査の結果によれば、大方がニホンザルに関しては、近年の出会い例の報告であり、大正末期、昭和10年代における個体数20頭をこえるムレとの出会い例は乏しく、他は戦後の例でほとんどが1～2頭との出会いであった（表1、2）。現在では、尾添川上流



図1 石川県石川郡；白山山麓調査地域図

の蛇谷を中心としてニホンザルの群れの生息話題が出現している（伊沢1972）。同地区に限らずニホンザルの古い時代の生態分布状況はいまだに数10年をさかのぼれない現状であるが、今回のごとき野生ニホンザルとの出合記録調査を基にして半世紀前を目安に若干の地域的なニホンザルの過去の分布状況も推測可能となるものと考えている。このような白山山麓の蛇谷地区のごとく特色あるニホンザルが密集している地帯に接近して住む人々の集落が存在するというこういった地帯における人々のニホンザル観との地域的対比を試みたいと考え、ニホンザルが全国的にみて典型的に分散し長い歴史過程をへて、その生活圏が、森林破壊、道路開発、農耕進出などで分断されていると考えられ、現在生息しているニホンザルの分布に著しい影響を与えていると思われる滋賀県琵琶湖周辺における人々のニホンザルをめぐる動物観を極めて限られた範囲であるが抽出し、そこでのニホンザルをめぐる伝承・禁忌実態等の人々の残存意識をとりあげ、サルという動物への認識度や動物観を中心に白山山麓の場合との比較を試みたものである。滋賀県は、我国戦国時代以後政治経済の中心とならず、時の中央政府とは絶えず一定の距離をおいてそれと結びついてきた。それが比較的荒廃の少ない自然環境の保存に役立ったと今日では考えられるが、ニホンザルをめぐる民間伝承の遺存数も50件を越えており（広瀬1971）、ニホンザルをめぐる民間伝承の内容も豊富である。滋賀県下のニホンザルをめぐる民俗伝承の調査は1970年よりはじめているが（広瀬1970）、本稿ではすべて1974年10月～11月に実施したアンケートへの解答のみから解析を試みたものである。本稿における白山山麓および、琵琶湖周辺の両地区の比較民俗学的考察を試みるに当っては、その居住域と人口密度の高い点から総体として、よりニホンザルとの接触の機会の多かったとみられる一方において人々の文化生活、文化交流が活発であって必然的にサルの話題も多かったとみられる琵琶湖周辺の場合を「琵琶湖におけるニホンザルをめぐる動物観の特色」として考察し、ついで比較的地域が限定され、ニホンザルに関する民間信仰・民俗習俗などの残存の乏しい白山山麓の実態を、動物観の一つの特色としてとりあげ、比較考察を試みる。

## II 野生ニホンザルとの出会いと人々の感情—白山山麓と琵琶湖周辺地域の人々の感じ方の比較—

野生ニホンザルとの出会いに関するアンケートへの解答は、白山山麓住民からは、1974年11月末までに33件の報告をうけた。これは、「野生ニホンザルをみたのは、いつ、どこであったか、その時の数」を尋ねたものである。白山山麓以外の金沢市近郊在住からの例であるが、野生ニホンザルとの出会い体験とはことなるが、サルまわしのサルを大正期に2頭みたという報告もなされた。本稿では、この33件の報告をもとに考察を試みたが、その内容は、石川県石川郡尾口村、中宮、尾添、瀬波白峰の居住者からの報告が中心となっている。その年令も最高75才から20才にいたり、解答者の年令に巾があるにもかかわらず、明治期におけるニホンザルとの出会い例は、わずか白峰村藤部与二氏82才から明治42年白峰で1頭のサルに出会ったと報告している。

次に古い例として、大正元年中宮でニホンザル10頭を64才、農業関係者の老婆がみていると報告している。また、尾口村に住む65才の男子が大正8年手取川で1頭のニホンザルに出合っているのと、同年中宮で、現在64才の老人が頭数不明であるが、ニホンザルに出合っている。その他尾口村市原の79才の老人が大正10年岩間で30頭に出合っていると報告があった。10頭以上のニホンザルの群れに合っているのは昭和10年中宮の80頭、昭和32年尾添で20頭、昭和35年三ツ又で60頭であり、これからみると、1～3頭のサルをみたという報告が、33件中10件あった。また、野生ニホンザルとの出会いは、昭和40年代、そして現代にいたって多くなり、14件となっている。ところが、人々の野生ニホンザルとの出会い時に抱く感情にその時の相方の状況にもよるのであるが、サルとの出会いの際、「こわい」と感じるもの3名、かわいい20名、何とも感じない8名、かわいいと感じているものが解答者中圧倒的に多い。しかも「好き」と答えているもの16名、「きらい」2名、「どちらでもない」が9名で、大半がサル好きということになる。ただ、2名の「きらい」という答が82才の白峰の老人と、同じく白峰の53才の教員から報告され、特に後者はその理由に、「サルの目がきらい」と答えている。しかしながら同解答者は、ニホンザルとの出会い時には、「おもしろい」と答えているのである。以上の解答例で考えられることは、ニホンザルとの出会いの体験が、ハナレザルのような個体が含まれている点と、その出会いも近年の出来事であることからして、サルに対しての恐ろしさのようなものを感じるようなこともほとんどなく、むしろニホンザルを観念的にこわい動物としているのは、教員・公務員・団体役員といった知識人層からの解答があったことが注目されるべきであろう。

そこで、これを滋賀県琵琶湖周辺の場合と比較してみると、野生ニホンザルとの出会いについては、全解答者中82名からの報告を得たのであるが、明治初年が1件であり、大正期の報告は全くない。そして昭和初期3、昭和10年3、昭和30年代7、昭和40年代15と近年に至るほどニホンザルとの出会いの機会が増加しているが、これも比叡山のサルが餌付けされて後ひんばんに見られるようになったことも一つの理由となっていた。野生ニホンザルに出合った場所は、琵琶湖周辺の各地域にわたってい

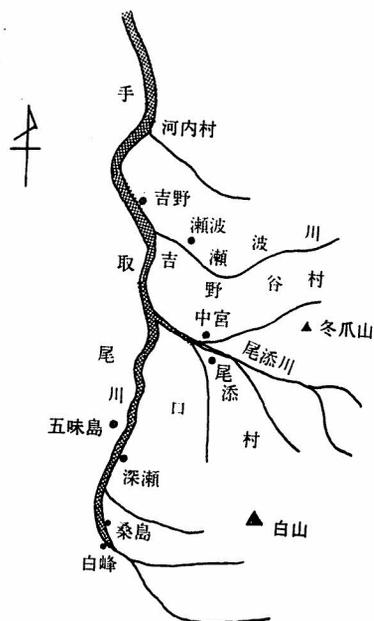


図2 白山山麓  
手取川に沿った調査区域

るが、現在のニホンザルの生息地として報告されている分布地域と、解答者の報告も関連がふかい（川村・朝日1972）。特に、興味ある点は、そのニホンザルとの出会いの頭数が10頭前後が圧倒的に多いという点であり、この事も、滋賀県下のニホンザルの分布の現状を示す指標となるものと考えられる。野生ニホンザルこそは、日本の自然環境の状況を示す指標動物に充分値する動物なのである。これらの地帯に住む人間すなわち人々のニホンザルという動物への動物観についてみれば、白山山麓地帯の人々の場合と同様にサルを「かわいい」と感じているものが多く、しかもその理由をみる限りにおいては、地域的な動物観、自然観、文化価値観等のちがいや、複雑な文化意識を成立せしめている琵琶湖周辺住民の場合の方がより多彩なニホンザル嫌好感の多くの理由を挙げている。「こわい」と答えたものは、解答者全員59名中18名であるが、それも年令各層にわたっている。そして、サルは山において出合う限り、「こわい」動物とも意識されている面がここに示されている。今回収集した

表 A

白山山麓地帯における住民にみられたニホンザルをめぐる動物観 解答33名

- (1) あなたの土地ではサルはよい動物ですか悪い動物ですか。  
よい 5, わるい 4, どちらでもない 7, 解答なし 17
- (7) あなたはサルが好きですか嫌いですか。  
すき 16, きらい 2, どちらでもない 9, 解答なし 6
- (11) もし、山や里でサルをみかけたらどんな気持がしますか。  
かわいい 20, こわい 3, 何とも感じない 8, 解答なし 2
- (12) サルが薬になるということを御存知ですか。  
しっている 20, しらない 2, 解答なし 11

表 B

琵琶湖周辺における住民にみられたニホンザルをめぐる動物観 解答59名

- (1) あなたの土地ではサルは良い動物ですか悪い動物ですか。  
よい 4, わるい 6, どちらでもない 49
- (5) あなたはサルが好きですかきらいですか。  
すき 19, きらい 3, どちらでもない 33, 解答なし 8
- (8) もし、山や里でサルをみかけたらどんな気持がしますか。  
かわいい 27, こわい 18, 何も感じない 9, 解答なし 5
- (9) サルの黒焼について御存知ですか。  
知っている 30, しらない 27, 解答なし 2

野生ニホンザルとの出会いをめぐる解答例そのものは数量的には少なく、地域住民の意識調査としては充分なものでは勿論ないが、あくまでも本格的な調査のための予備調査の域を出ない。しかしながら、日本人が過去から現在にいたる間に、野生ニホンザルをめぐる「こわい」という観念をもつものがかなり存在していることが、実際に判明してきたのである。このような予備調査にもとずき実験的アンケートを試み続けた結果の集計、統計の分析法にも多くの知見をえたので、今後、巾ひろい関連領域の学者との討議、検討を得て、今後の地域住民の自然観、動物観の実態調査や自然認識度の分析を試みたいと考えている。

## 様式 1

### 琵琶湖周辺住民対象アンケート様式 (1974年) (ニホンザルに対する意識調査)

私たちは、ニホンザルについてあらゆる点からの調査と研究を続けてまいりましたが、今回は貴殿のお暮しになられている地方でニホンザルについてどんな感じ方を昔からしてこられたかをお聞きできればと存じお手紙をさしあげます。お忙しい中を本当に恐縮でございますがよろしくお願い致します。

サルについて御存知のこと、お気づきのこと何でもお気軽に御記入下さい。なお、解答はハガキに御記入下さい。

- (1) あなたの土地ではサルはよい動物ですか。悪い動物ですか。  
よい      わるい      とちらでもない
- (2) サルのことを口にするとうんぎが悪いと云うことをきいたことがありますか。  
ある      ない
- (3) あなたはニホンザルのよび名をサル以外に知っていますか。  
例……アニヤン、エテコ、大将、モンキー
- (4) あなたはサルが好きですか。きらいですか。  
好き      きらい      とちらでもない
- (5) 好き、きらいの理由(わけ)がありましたら書いて下さい。
- (6) サルという漢字でかわった字を御存知ですか。  
例……猿・禺
- (7) ニホンザルの野生の姿をはじめて見たのはどこでしたか。そしていつごろでしたか。また何頭ぐらいでしたか。  
時代      場所      頭数
- (8) もし、山や里でサルをみつけたらどんな気持ちがしますか。  
かわいい      こわい      何も感じない
- (9) サルの黒焼について御存知ですか。  
知っている      しらない
- (10) サルについての方言やまじないを御存知ですか。  
例……サルが里におりると雨がふる。
- (11) サルの名のつく道具や家具がありますか。  
例……サルコ、サルオ
- (12) お祭りにサルの面や衣裳が使われていますか。  
使われている。      使われていない。

## 様式 2

### 白山山麓白峰住民対象アンケート様式 (1974年) (ニホンザルに対する意識調査)

今度は貴殿のお暮らしになられている地方でのニホンザルについての感じ方についてお伺いできればと存じお尋ね致します。ぜひ御存知のことおきかせ頂ければ幸いです。お忙しいところ本当に恐縮でございますが、よろしくお願い致します。

◎サルについて御存知のこと、お気づきのこと何でもお気軽に御記入下さい。記入しないところがありましても結構です。

- 1) あなたの土地ではサルはよい動物ですか、悪い動物ですか。  
よい            わるい            どちらでもない
- 2) サルのことを口にする<sup>ぐち</sup>と縁起が悪いと言うことを聞いたことがありますか。  
ある            ない
- 3) 「たばこまえ」のとき「サル」といってはいけないということを聞いたことがありますか。  
知っている            しらない
- 4) 早朝からサルの話しをしてはいけないということを聞いたことがありますか。  
ある            ない
- 5) あなたはニホンザルの呼び方を「サル」以外に知っていますか。  
知っている            しらない
- 6) そのサルの呼び名前をいって下さい。
- 7) あなたはサルが好きですか、きらいですか？  
すき            きらい            どちらでもない
- 8) サルという漢字でかわった字を御存知ですか。  
知っている            しらない (例；猿, 猯)
- 9) その漢字を書いてみて下さい。
- 10) ニホンザルの野性の姿を始めて見たのはどこでしたか。そしていつ頃でしたか。また何頭ぐらいでしたか。  
時代            場所            頭数
- 11) もし山や里でサルを見かけたらどんな気持がしますか。  
こわい            かわいい            何とも感じない
- 12) サルが薬になるということを御存知ですか。  
知っている            しらない
- 13) サルについての方言やまじないを御存知ですか。  
知っている            しらない<サルが里におりると雨がふる>
- 14) もし御存知でしたらあげてみて下さい。
- 15) サルとカッササルとテングなどの言い伝えがありますか。  
ある            ない。
- 16) ウマ小屋やウシ小屋にサルの絵をはったことがありますか。  
ある            ない
- 17) サルに関した唄や民謡が残っていますか。  
残っている            残っていない            しらない
- 18) サルについてお祭りや行事にあらわれるものがありますか。  
ある            ない
- 19) お宅にはサルの名のつく道具や家具がありますか。  
ある            ない <例；サルオサルコ>
- 20) サルの害でこまったことがありますか。  
ある            ない

### III 琵琶湖周辺におけるニホンザルをめぐる動物観

自然認識度調査に関しては、現在のところ決して満足のいくような全国的、組織的な仕事がなされていない現状であるが、1974年10月～11月に実施を試みた、小規模ではあるが、琵琶湖周辺の住民の一部を対象としたニホンザルをめぐる動物観の調査は予期以上の豊かな内容をもたらしたので、以下に報告を行なう。

かつて川喜田(1973)は、山と谷の生態をめぐり、「日本文化を育てた正統的な土地は、谷間か平野であり、日本の村は山と谷のコンビネーションに基礎をおく」と述べている。また、「どんな労働に従事するかによってどんな人間が形作られるか」の問題について、有機的、個性的な生態的土地利用にかかわった人々と文化の問題にもふれているのであるが、日本列島に古くからすみついて、日本人たちと長い間かかわりあっているニホンザルという生きもの歴史についての関心をさぐることは、人々の生活の側面も明らかにすることにつながるものである。今回のアンケート調査の結果にもとづきニホンザルをめぐる今日伝承されている禁忌中、主として自然生命に関係のあるものを中心とした諸禁忌についても若干の知見をえたので、第一に滋賀県琵琶湖と石川県石川郡吉野谷村の手取・尾添川に沿った白山山麓地区の両住民の一部について、これ等地区におけるサルの禁忌の伝承の実態といくつかの特色を明らかにしてみたいと考えている。面積685km<sup>2</sup>、周囲235kmをこえる琵琶湖は、今日の人間にとっていかなる環境であろうか。民俗学者は、「かつて山の神と湖の精霊は川の妖精によって結ばれていた」(影山1972)とも述べていた湖の周辺の自然に関し、人間能力の限界を肯定し、不可抗力領域の全権を神にゆだねるという形から出発している禁忌や呪術の成立の基盤は恐らく、環境の変化と対応し(広瀬1973)、しかも後述する石川県下白山山麓の住民とその自然利用においてもかなり異なるものがあり、早くからひらかれた湖南部の農耕文化や、湖西部の上代文化圏等は、ニホンザルという日本個有の動物をしてタブーや、信仰のシンボル化せしめた過去の歴史から漸次呪術として自然や人々の克服へむかっていった過程が存在すると考えられる。呪訴とかかわり、サルを山の神、天つ神のトータルと考えた古代人にとって、サルの恐れを基盤とした動物観は、どのような形で現代人に伝えられていたのだろうか。禁忌を含むサル観が果して今日において全く消滅し去ったものであるか、また、サルという言葉をさけて他の言葉にいかえてきたかつての過去の伝承は、現代の人たちの心の中にどのように理解されているのかを明らかにしてみたいと考えるものである。ニホンザルをめぐる動物観を考察するに当って重要なのは、ニホンザルは種として長い歴史をもった生物であるという点であろう。

過去において殺生を禁じた宗教的な殺生戒から、現代における成文法としての鳥獣保護法に基くサル類の禁止等をふくめば、その及ぶ範囲と内容にかなりの巾がある。いずれにしろ、特定動物としてのニホンザルの殺生を禁じた言葉は多い。サルを食したり、サルという言葉で禁じた狩猟・漁労・海上交通・生活風習が今日なお全国各地に伝えられているが(広瀬1972)、サルを恐れ、いみきらった時代から、積極的にサルを封じこめ、サルを人間の側に有利なように考えるに到る過程を考察することこそが重要ではなからうか。今回の実験的予備アンケート調査は、琵琶湖周辺の高島郡、伊香郡、東浅井郡をはじめとして北部、東部、南部、西部に居住する日吉山王社関係者、民俗研究会その他計148名を対象とした。石川県石川郡吉野谷村を中心とした手取川流域、尾添川流域には41名を対象に聞き込みとアンケートによる調査を試みたのであるが、その結果琵琶湖周辺から59名の解答をえた。また尾添川、手取川に沿って33名、総計92名からの解答をえたものである。解答者からの解答率は47%であり、必ずしも高率とはいえないが、各地区における解答者の内容も各職業、年齢におよび興味ある動物観や自然観をふくめたサルに対する現代人の感じ方が特色あるものとして出現してきたと考えて

いるものである。

調査項目は、湖周辺におけるサルをめぐるサルの呼び名、人々の生活とのかかわり合いをめぐる12項目(様式1)、また尾添川に沿った村落居住者へは動物観、禁忌伝承、地域生活のなかでのサルの話題など20項目(様式2)にわたって質問を試み、その答を得たものである。調査は今後も引きつづき行なわれ、またその集計がすすめられている。したがって本稿は中間報告である。アンケートへの解答は、琵琶湖周辺地区からは先述のごとく59名であり、その年齢は20才代から80才代におよんでいたが、とくにその中50才代、60才代が半数を占めていたので、この世代の人々のニホンザル観がやはり浮きぼりにされざるをえない。また、これらの解答者の職業は、神官・僧侶が20名、公務員13名、農業造林業者7名、教育関係者5名およびその他で14名で、そのうち特に農業・造林関係者7名からの解答に特色がみられる。またこれら解答者の居住地区は琵琶湖東部、東浅井郡14、伊香郡10、北西部高島郡17、その他西部大津市5、その他東部・南部13の各地域にわたっている。琵琶湖周辺に生活している人々たちにとって現代では、サルをそれぞれの各地域で果してどんな風に意識しているのだろうか、果して、「よい動物」として認められるか、あるいは、「悪い動物」なのか、こうした判定を極めて少数ではあるが上述の59名の解答にみる限りでは「良い」4、「わるい」6、「どちらでもない」49となっている。「よい」と答えたものは、すべて公務員、自営業のもので年齢は27才、55才、65才、68才にまたがっている。これらの解答者はサルのことを縁起が悪いとするとする比較的全国各地にひろく知られていると考えられているニホンザルに関する禁忌を全く知らない。しかも野生ニホンザルに山や野で出合ったら、「かわいい」と感じると全員が答えているのである。これは野生ニホンザルとの出会いに対する現代人の感じ方の傾向を示す一例になるのもであるとも考える。ニホンザルへの嫌好感というものは土地や住民の年齢によって異なることは推測されるが、今回の調査でもそれが明らかになってきた。サルを「悪い」動物だとしている解答者の居住区をみると、琵琶湖の北部、北西部に偏在している。しかもこれら6名の解答者の年齢が、23才から68才までの年齢層にわたっているのでサルへの悪感情をもっている地帯は地域的な片寄りがみられて伝承されているのではないとも考えられる。のこり49名は、「どちらでもない」と答え、このような感じ方をしている解答者は当然、「よくない」としている者と同地区、周辺に存在している。このような地域全体での住民意識中のサルへの感情の実態も今度はさらに一歩つきすすんで個々の人々を対象に「サルが好き」か「きらいか」という問いかけを発してみると「好き」19、「きらい」3、「どちらでもない」33、解答なし4である。サルを「好まぬ」とする湖北部の高島郡、伊香郡、東浅井郡のものは、49才農業、55才農業70才、神職のものであったことに特色があるといえよう。そのサルを好まぬ理由はいずれも明瞭に作害であると指摘している。また、野生のサルとの出会い時に抱く感情に関しては、その内、農業従事者の2名ともニホンザルをめぐる今日全国的に知られているような種々な日本文化史上の興味ある話題などに特に関心を抱いておらぬし、比較的全国的に知られていると思われていたサルの黒焼についても知らない。今回のアンケートにより、高島郡朽木から、イカダ渡しを「サル流し」とよび、身軽な人をよびならわした伝承が報告されたし、また今津町からは、「サルが里におりてくる年は豊作」東浅井郡湖北町からは、「山へ行くときは刃物をもって行くとサルに囲まれても助かる」、伊香郡からは、「サルを追う時、赤い布か板もちいる」という伝承が収録された。次に、質問事項の中、特に中心ともなる「サルの話をすると縁起が悪い」という云い伝えを知っていたものは、アンケート解答を寄せた59名中、28名が、「聞いたことがある」、28名は「聞いたことがない」という解答に接した。このようなニホンザルをめぐる禁忌も現在次第に消滅しつつあるのであるが、特に40才～50才代のものが、この禁忌伝承を聞いたことがないと答えている。今回の調査では、残念ながら高令者層からの解答例がすくないので、年齢各層間における禁忌消滅の様子は、充分つかみきれないのである

が、ニホンザルをめぐる動物禁忌の消滅過程こそは、地域におけるニホンザルの生息環境や人間の住環境のひろがりや強くかかわるものであると考えられるので、さらに調査活動を続けたいと考えているものである。次に、「サルのお話をすると縁起が悪い」と答えたのは農業者5、造林関係者1名中、農業者は、高島郡、東浅井郡、伊香郡の湖北郡の居住者からのものであり、すべて野生でサルに出合ったとき、「こわい」と感じると答えている。特にその中1名は、「にくたらしい」と言い切っている。ニホンザルに関しての生の感情を職業別に調査することにはいまだ十分な方法が確立されていないので今後の調査で実験的な試みも続けたいと考えているものである。

日本列島は、南北に細長く、しかもその内部が錯雑してあるいは川筋・盆地、平野、岬、島など等に地形をわけ、互の交通もあまりなめらかに行きがたい場所が多い。したがって世代的伝承の反復停滞の度が特に強いが、ニホンザルの伝承も、ある地域の共同体本来のものであるか、またある時代の風にそまったものかを区分してみなければならぬ。その点今日の調査資料はいまだ不十分であり、今後の調査にまたねばならぬ。サルへの人々の動物観の一端を示すニホンザルの禁忌伝承そのものは、事物行為の伝承のうちでも心意伝承に一番強くむすびつくものであるが、これらは、湖周辺の自然史および、人間の生活文化史が有機的にとりあげられない限り、正確な理解には至らないと考えているものであり、ニホンザルをめぐるアニマルロアの解明には不可避の手法である。とくに動物観の追求自体は、単なる「語り」によって伝承されたものではなく、社会生活、人間の意識の産物であり、また伝承とは史料なき史料（芳賀1974）といわれてきたものである。日本人のニホンザル観そのものが、人間生活のどの部分でどのような環境、自然および社会環境の中で神聖なものや、けがれと関連して発生し、継承されたものであるが、これが果して一部にいわれるようにおくれた人々の未開発性のあらわれであるかどうかを、人々の生活の場にそって発掘したいと考えているものである。ニホンザルの禁忌に関しては、いまだ推測の域を出ないが必ずしも未開発性の現われではないのではないかという疑いを抱かざるをえないのである。今日までの歴史過程で消えつつあるニホンザルの禁忌や動物観の変遷は、一面では共同体の掟の破壊であり、シンボルを大切にすることの衰失に関連する。日本人がいつの時代からサルのお話を意識し、かつ克服していったものであるかは不明であるが、サルにこだわった信仰が、たとえば、山王信仰などが長く伝えられてきたことは興味ある事実である。現在においては、日本民族心理の一端を形成する野生生物に対する日本人の動物観の歴史そのものの解明こそが、いそがれる仕事の一つであるに違いない。さて次に今回は、琵琶湖周辺の地にサルという語をきらって別名を使った伝承的な言い伝えがないものかとアンケート調査を試みたのであるが、「エテコ」という言葉が湖の周辺にひんぱんに出現していた。「モンキー」という言葉は、サルを嫌う北部地区に出現し、南部・西部にも出現した。「ヤエンポー」・「カブラ」などという石川県白山山麓地帯で出現する言葉がここでは見当らないことは興味のあることである。「サル」という言葉のほかに8種あげられ、とくに東浅井郡琵琶町の神職の者から「マシラ」が1例報告された。また薬用としてのサルの黒焼についてその知られ方をみると、「知っている」30、「知らない」27、「解答なし」2、したがって半数の者は知っていたのであるが、40才代～50才代での知らぬものが13名ありこの傾向は今後増加するものと考えられる。とくに75才と85才の者からサルは肺病・梅毒にきくという報告があり、これは、石川県白山山麓に巾ひろく知られている黒焼についての薬用口承とくらべてみると薬利効果の認識度がみられる。

黒焼を知っていたものは、公務員・教育者・神官の一部であって、むしろ良く知っていると思われる農業者がこの地帯では黒焼を知らなかった点については、今後の調査でその理由を明らかにしてみたいと考えている。

表1 琵琶湖周辺における野生ニホンザルとの出会い

— 1974年11月調査 —

No	氏名	年令	職業	性別	住所	野生ニホンザルとの出会い			備考
						時代	場所	頭数	
1	藤井龍心	71	僧侶	男	高島郡マキノ町	—	—	—	
2	藤田長政	53	神職	—	—	昭和44年	比叡山	5	
3	前田雪二郎	64	—	—	—	—	—	—	
4	伊吹甚一郎	69	公務員	—	—	昭和40年	百瀬川	30	
5	松田政一	53	扇子業	—	安曇川	—	—	—	
6	瀬戸川静雄	55	農業	—	マキノ町	昭和20年	山	50	
7	沢井甚三	46	—	—	朽木町	昭和48年	当地	10	
8	桑原八郎	58	教員	—	新旭町	—	—	—	
9	熊谷寿治	30	会社員	—	安曇川	昭和40年	米原町 上月生	6	
10	久保田暁一	45	教員	—	高島町	—	—	—	
11	清川貞治	41	—	—	朽木町	昭和	菊川坊	15—16	
12	北川重義	75	神官	—	新旭町	昭和40年	比叡山	5	
13	橋本鉄男	57	無職	—	安曇川	昭和37年	今津 天増川	20	
14	岸本清夫	57	公務員	—	今津町	昭和2年	今津杉山	10	
15	木谷斉	38	教員	—	—	—	—	—	
16	森田光則	70	神職	—	—	昭和10年	谷合山	10	
17	—	49	—	—	東浅井郡浅井町	昭和38年	村より 1 Km	30	
18	室昇	52	会社員	—	びわ町	—	—	—	
19	—	—	神官	—	—	—	—	—	
20	後藤欣爾	50	農業	—	—	—	—	—	
21	小林末雄	48	公務員	—	—	昭和47年	比叡山	2	
22	寺村一彦	52	神職	—	—	—	—	—	
23	山田外二	65	農業	—	湖北	—	—	—	
24	河毛好一	60	—	—	—	—	—	—	
25	伏木貞三	47	公務員	—	浅井町	昭和30年	霊仙岳	30	
26	寺義文雄	51	—	—	—	—	—	—	
27	生島竹雄	66	神官	—	びわ町	—	—	—	
28	小堀定泰	64	僧侶	—	浅井町	—	—	—	
29	草野文男	—	造林	—	—	—	—	—	
30	明石祐堂	69	僧侶	—	—	昭和36年	近く	1	
31	伊香香忠	29	公務員	—	伊香郡木之本町	—	—	多	
32	熊谷文三	69	神職	—	西浅井	昭和30年	社内	1	
33	岡山要	65	—	—	中之郷	昭和49年	丹生地区	30	
34	中村国男	59	教員	—	本之庄町	—	—	—	
35	木村米二	45	公務員	—	高井町	昭和40年	音羽	20	
36	浅野大典	59	—	—	—	昭和46年	—	80	
37	長谷川銀藏	49	農業	—	余呉町	—	—	—	
38	高松幸恵	23	公務員	—	木之本町	—	—	—	
39	長岡真澄	75	神職	—	西浅井	昭和49年	動物園	1	
40	片桐新之丞	65	無職	—	高月町	—	—	—	
41	中司稔	73	博物館長	—	大津市田上	昭和48年	比叡山	20	
42	高大良雄	—	旅館	—	びわ湖	子供の頃	頃嵐山	10	
43	大杉正治	27	自営業	—	坂本	昭和31年	高崎山	多数	

44	竹内 将人	68	無職	"	大津市杉浦	—	—	—
45	北川 道次	48	僧侶	"	" 三井寺	—	比叡山	10
46	伊藤 晋	65	神職	"	滋賀郡志賀町	昭和19年	比叡山	100
47	石塚 深左エ門	81	"	"	"	昭和49年	山	2
48	細川 行信	48	教育	"	守山市勝部町	—	—	—
49	関 啓司	25	会社員	"	" 森川町	昭和40年	比叡山	—
50	木下 長治	—	公務員	"	犬山郡多賀町	—	醒ヶ井	—
51	中山 貞武	80	博物館	"	" 豊郷	明治初年	土佐劍山	10
52	河村 太郎	65	公務員	"	犬山郡	昭和30年	比叡山	1
53	森下 太郎次	60	神職	"	蒲生郡中之郷	昭和43年	二ヶ山	12
54	中村 和夫	38	公務員	"	長浜市新影	昭和49年	余赤比	8
55	藤井 伊佐美	31	"	"	虎姫町唐田	昭和48年	日野	10
56	若村 利三郎	55	神職	"	犬山郡日野町	昭和48年	日野	10
57	—	—	"	"	甲賀郡土山町	昭和48年	山	7
58	—	—	—	"	" 水口町	—	—	—
59	庫野 皇守	—	—	"	高島郡曇川町	—	—	—

#### IV 白山山麓におけるニホンザルをめぐる動物観

ニホンザルが、過去から現在までに、人々の周辺に生息し、近世以後比較的近年までサルが話題が周辺に存在した石川県石川郡下の白山山麓の住民の意識に内在するニホンザルに対する動物観を追求してみよう。現在解答を得ている33名を中心に、この地区住民の一部にみられたサルの禁忌の特色を明らかにする。年令で見ると20代から60代まで、年令の明らかにされなかったもの11名であり、資料としては完全なものではないが、まず職域のひろがりで見ると、農林業、旅館業、神官、手工業者、会社員公務員の広範囲におよび、その居住地域も尾添川にそって、瀬波、尾添、中宮の21名、白峰12名の総計33名で、主として尾添・中宮、白峰の居住者の動物観を中心に考察する。白山山麓地区の場合は、琵琶湖周辺の場合とことなり、女性8名からの報告が含まれている。男と女のニホンザルをめぐる動物観の抽出も興味ある点であるが、今後の調査にまちたい。白山山麓では、サル以外の呼び名に関しては7種があげられ、琵琶湖周辺より1種少ない。エテコ、エツテコが9、ヤエンボウ5、カブラ4、ゲイサン2、と極めて特色ある云い方があらわれている。サルマル1、生徒2、も注目されるものであるが、エテコが圧倒的に多く、これは琵琶湖地帯と同様である。狩猟をめぐる禁忌とかかわりのあるヤエンボ、カブラという呼称は、当地方的なもので、狩猟や山林業とのかかわりの濃い生活民の間に使用されるものであり、「カブラ」という呼称は全国的にみても珍しいのではないかと考えているものである。中宮ではヤエンボ、エテコ、カブラの3種、尾添には、ヤエンボが現われませんが、カブラ、エテコ、セイト、ジイサンの4種が報告されている。ニホンザルをめぐる嫌好度についての解答により当地域の人たちがニホンザルをいかなる動物としてとらえているかが判明されてくる。先にのべたが、「サルが好き」16、「きらい」2、「どちらでもない」9、解答なし6であった。中でも「嫌い」と答えた白峰村の公務員は、「サルが女を馬鹿にする」ことをサルを嫌う理由としてあげている。同人の解答によれば、野生のサルとの出会いに関しては、「おもしろい」と答えているのである。動物観の正確な抽出というのは、極めて困難な仕事でもあるが、引きつづきより多くの情報資料を収集しなくてはならないと考えるが、今回サルを「好き」と答えた者の中、そのサルの好きな理由の主なもの、「人間に似ている」、「動作がおもしろい」という点に求められ、このことは、

琵琶湖周辺の場合にみられるように「愛嬌がある」という理由をはじめとして他にいくつかの理由があげられたのにくらべてみると、白山山麓の場合はそのあげられる理由に乏しいと考えられるのである。その中でも「菓用になるから好き」という解答が出作り経験者から報告されており、また「嫌い」とのべた者の中には、その理由を「目がきらい」とも解答している。特に野生ニホンザルとの出会いに関して、山であった時に、「こわい」と感じているもの3、「かわいい」20、「何とも感じない」8、したがって8人の女性を含めてサルを「かわいい」と感じている者が、大半を占めていた点は、かねがね、出作りでサルに過去にひどい目にあった地帯の住民のサル観としては意外な結果であるともいえよう。女性の8名全員がサルが好きと答え、7名が山で出合っても可愛いと意識し1名がどちらでもないと答えている。

果して、この地域ではニホンザルは女性に特に好まれるのであろうか、極めて興味ぶかいニホンザルと人々の生活民俗史をめぐる追求課題である。白山山麓のこの地区では現在までの現地調査でも豊富なサルの民間伝承が出現している。しかしながら、かなり明確になってきたことは琵琶湖周辺とことなり、民間信仰などと結びついたサルとの祭りに関する伝承のたぐいが、目下のところみあたらない。山王の猿、庚申の猿は、中宮、尾添での今回までの調査でも、その伝承例を全くみないのである。狩猟伝承をめぐり、東北地方にみられる山神の霊とともにあるき山神代行者として御朱印をいただいた日本全国の山伏は内裏の許可を之て知行し、殺生しても神仏のとがめを受けない、(狩猟習俗1)といった積極的な野生生物へかかわる生き方の伝承が白山山麓には伝えられていないのではないかと考察される。サルに関しては確かに山林業、狩猟経験者に禁忌が伝承されている傾向があるが、古くからの狩猟習俗がそこに定着していたものとは考えられにくいのである。尾添村には、「1匹サルを追うものは自分の命をも失なう」という狩猟に関するといういましめが、残されているものの(広瀬・水野1974)、「サルを多く殺したむくいでサルになる」というような近畿地方に伝わる殺生戒の具体的な出現をみていないのであるが、元来、禁忌的行為というものはない間の住民の共同生活の中に自然と固定しながら伝承されるものであるだけにサルをめぐる動物観もまた人々の共同生活の反映でもある。

白山山麓住民の場合も禁忌は生活とからみあいながら成長発展し、結局、豊作を祈願する現実的な要求のあらわれ方が信心と禁忌という文化現象を礎いたものであるが、それがどれほど大きく人々の社会生活に働かせかけたものかについては、いまだ実証できない。今後の調査の進展と共に人々の意識の解明への手がかりをつかみえるものと考えている。

動物禁忌に関していえば、各地に伝えられている「船に犬や猫のような四つ足をのせることはいけない」という禁忌が各地において存在していることと関連して、現在も琵琶湖の船上交通をめぐるサルに関する禁忌を調査中であるが、今のところでは、船上交通のタブーとしてのサルの話題に乏しく、魚獲をめぐる禁忌が高島郡の一部から報告されるだけである。しかも今回の調査では、滋賀県高島郡天増川の3人の猟師なども専門職業的でなく、動物伝承の知識も乏しい、忌み言葉は、特色の条件の場合だけに用いられるのが特徴であった。このように地域社会における人々の共同体生活の中に具体的に現われる動物禁忌の中でもサルに関するものに関しては、その発生出現年代には地域の特色があるものと推定され、白山山麓での狩猟や自然への働かせがけが人々の土地定着時期とどのように関連するかによって考察されねばならぬと考えている。しかも、中宮、尾添は、白山信仰の中心でもあり、仏教が盛んであり、狩猟は過去においてはおこなわれず、近年にいたってサルに関しては他県の猟師が中心となって蛇谷川に生息したサルを捕獲したと伝えられている(林1969)。このような地帯において出作り生活を基盤として山中に畠を切りひらいた人達にとっては、サルをエンコ、ヤエンボ、カブラと別名で呼びながらも山における狩猟の豊穡をねがい、一方において耕地を荒らし、

施すすべなしと口承されるニホンザルを手こずりながらも、サルたちに強烈にくしみを抱くこともあったに違いないが、それでいて、微妙なところで、サルを禁忌をこえた呪術的な自然克服を考え、積極的にタブーを封じ込めていったものと推測される。それは自然の生きものとしてのサルへの親密観の発生、薬用としてのサルの高貴さへの認識など複雑な動物観の成立と発展の中で、人々は野生ニホンザルとの接近の機会を漸次失ってきたものに違いない。

琵琶湖周辺の地帯にひんぱんにみられる山王信仰や、農耕文化に根ざす仏教的諦観や儒教的禁制がサルをめぐる民間伝承にも強い影響を与えていたのにくらべて（広瀬1970）石川県石川郡下の手取川・尾添川に沿った白山山麓地域では、土地そのものが、個性的であり、自然と人々との直接的にかわりあう厳しい生活の中から積極的、能動的な動物観が育成され、サルを自然の生物として山川草木の生命を認識する生命観の上に立って、あらたに禁忌をこえた動物感情を人々の心の中に育てていったのではなからうかと、同地域全般にわたってみられる素朴なサルへの親密感の深さに出会ってとくに強く思うものである。

かつて、東北地方の猟師にみられた狩猟の伝承は、かなり積極的なものであり、猟師自身でも平気でサルをサルと呼び、胴着の背にサルの毛皮をつけると魔除けになるとしているし、サルの左手で瓜の種をまくとよくはえるといい伝えられていたり、庚申の日には、サルが沢におりてきて、みそぎをするから、それをねらって一度に10頭もサルをとったという云いつたえも存在しているのにくらべると白山山麓や琵琶湖周辺にはかかる伝承は現在までの調査では乏しい。サルに関しての民間伝承の形態は著しく地方差があり、とくに狩猟の禁忌についての差異を今後追求してみたいと考えているが、中部日本から西では、サルは捕らない動物とされており、サルをとることは良くないとされ、九州などでは妊娠したサルを打つことがもっともいましめられるべき狩人の行為の一つであるといわれている。このようなサルへの狩猟禁忌伝承のすさまじいばかりの多様な発生をみた地域における住民の生活はどのように白山山麓でのニホンザルの狩猟伝承者のそれと本質的にことなるのであろうか。

元来、禁忌行為は共同生活の中に自然と固定して伝承されたものであるが、期待に反してサルに関する禁忌が、白山山麓住民の間には多くのこされておらず、その中でもまだ、白峰地区が比較的禁忌が強いこされていた点に興味もたれるが、この白峰地区とても、「庚申の日は南の川で洗濯してはならない」とか、「サルの日の馬の病いは神のたたり」（窪1969）といった日常生活のなかに入りこんだ庚申とサルと結びついた信信が、この地区に伝承されていない。これは、同地区における民間信仰の多様化ないしは俗化をはばんだ人々の精神生活の内面の問題と、人々の暮らしを支えた交通や産業経済を基盤として自然そのものの影響と関連するものと考察されるものであり、今後の調査目標の一つでもある。

本論において、ニホンザルをめぐる動物観の地域比較のための対象地とえらんだ琵琶湖の周辺に残る社寺林は、生活環境の中に自然生活系を保存し復活して行く地域的なシンボルとしての新しい意義が、今日新しくみ出されているが、森林にすむサルたちも過去から現在にいたる過程で極限においつめられて分布、生息しているのである（川村・朝日1972）。これは、白山山麓にすむニホンザルの場合にも同様である。とくに白山の場合は、将来が問題である。スーパー林道の開発による野生生物の生息地がせばめられ、新しいニホンザルへの危機が迫まっている時、ニホンザルをめぐる禁忌と地域住民の動物観、自然観の底にひそむ野生生物への愛情の伝承を我々は重視しなければならない。森林の状況とそこにすむニホンザル、それに関連した日本人の生活の中の動物観を禁忌伝承や、野生との出合における感情のうちにとらえようという試みは本稿にみられるごとくまだ着手したばかりで不充分である。しかも、その調査方法も小規模であり、また組織的でもない。一方において、日

本人の民間信仰の中には、サルに逆に侮蔑の中にとらえる伝承すら今日にのこっている。

今回のアンケート調査（1974年）においても、滋賀県甲賀郡にみられた、「先祖が、はらみざるを殺したたたりで、一家の者は、皆きりょうが悪い」というサルのたたりが、今日まで伝えられているし、滋賀県滋賀郡滋賀町の魚夫にはサルという言葉の使用が禁止されていた。そして、これを聞くと今日でもひどく立腹する。

現代社会に生きている野生生物に対する日本人の民族学的な動物観や、自然への認識度の調査こそは更に活発に進められるべきである。「禁忌」に対応して、「呪圧」をそして自然や野生生物を克服していった伝承、例えば、鬼門の方向に魔除けに「サル」を置くといった伝承などもニホンザルに関しては出現をみているし、このようなタブーを逆に封じこめる伝承もその禁忌の数ほどにも沢山存在しているが、ニホンザルの禁忌伝承の特色については、稿をあらためて論述する予定である。

本稿においてとりあげ、今回寄せられた92名の報告をもとに石川県白山山麓と滋賀県琵琶湖周辺をめぐる自然環境の中に生活する人々の感じているニホンザルへの日本人の動物観を考察したのであるが、地域にまとまった形で嫌われ、分散して好まれている琵琶湖周辺の人々の間におけるサル観の特色と比較して石川県石川郡白山山麓では、ニホンザルは、地域にかたまった住民に好まれ、分散して嫌われている特色がみい出された。ニホンザルという動物は地域住民の意識をまとめてシンボル化しているのではないかという姿がここにも伺えたのである。農耕者間にみられるサルと人々の間における対立は、一般的には嫌悪観から侮蔑観へと向い、山村部における耕作者たちはサルをおそれ、サルと融合を意識しており、ここに平野部と山間部に生活しつづけた人々のサルという動物への態度の基本的な姿がみい出されるのではないかと考えている。

日本人のサルをめぐる民間伝承の調査をすすめるに当って、新しい伝承の成立や古い伝承の消滅をめぐる追跡を今後とも意欲的に試みたいものと考えているが、本稿では、ニホンザルをめぐる各種の禁忌伝承については、その一つ一つについて明らかにしえなかったのであるが、サルとヒトをめぐる諸民俗伝承のもつ地域社会と人々の生活時代の特色の間には、かかわっている地域の社会の人々の生活が大きく働いていることが判明してきた。そして、これら人間の生活史と対応したニホンザルの自然史も、漸次あきらかとされて行くものと考えている。禁忌の急激な消滅にひそむ共同体の掟そのものの破壊や、シンボルを大事にしようとしなくなる人々の生活態度は各地に生じており、これは自然の破壊行為にもつながっている。経済、産業の急激な変化は、日常生活での日本人の自然への嫌虚な接触をゆがめているのではないかと思われる点が多いのである。

表2 白山山麓地帯における野生ニホンザルとの出会い

— 1974年11月調査 —

No	氏名	年齢	職業	性別	住所	野生ニホンザルとの出会い			備考
						時代	場所	頭数	
1	山田 和一	42	家具店	男	石川県石川郡白峰村	最近	白山の峰	2-3	
2	織田 タマ	54	林業	女	"	昭和47年	栗の木	2	
3	山口 甚之助	78	—	男	"	大正	太田	10	
4	山口 甚太郎	53	林業	"	"	終戦直後	白峰	1	
5	藤部 与二	82	農業	"	"	明治42年	"	1	
6	兵井 庭一	64	林業	"	"	昭和37年	太田原	1	
7	加藤 藤太郎	53	教員	"	"	—	—	—	
8	新田 貞	38	公務員	"	"	昭和47年	桑島	1	
9	山田 春風	53	団体役員	"	"	昭和47年	白峰	1	
10	小田 又七	—	—	"	"	—	サル山	15	
11	永井 清正	—	—	"	"	昭和47年	白峰	1	
12	左屏 介一	—	—	"	"	昭和48年	"	3	
13	島田 紀子	38	主婦	女	石川県石川郡尾口村	昭和40年	蛇谷	50	
14	甘日岩 みか	75	無職	"	"	昭和元年	桑島	20	
15	島田 フコ	60	"	"	"	大正8年	白山麓	—	
16	吉谷 兎治	65	公務員	男	"	大正10年	手取川流域	1	
17	佐藤 清志	74	無職	"	"	昭和	岩間	30	
18	島田 博	70	"	"	"	—	白山麓	—	
19	山田 建造	—	—	"	"	昭和48年	—	—	
20	丸尾 好子	43	旅館業	女	"	昭和35年	中宮	—	
21	京正 外志雄	—	—	男	"	昭和11年	三ツ又	60	
22	山田 辰男	51	—	"	"	昭和47年	東井谷	15	
23	不 明	—	—	—	"	昭和48年	蛇谷	30	
24	森 長治	20	公務員	男	石川県石川郡吉野谷村	—	中宮	20	
25	不 明	—	—	—	"	—	"	10	
26	不 明	—	—	—	石川県石川郡吉野谷村	—	—	—	
27	高橋 政子	—	—	女	"	昭和44年	中宮	20	
28	林 与亮	74	—	男	"	大正11年	"	10	
29	林 のぶ	64	—	女	"	大正1年	—	—	
30	不 破戸	—	—	男	"	大正5年	出作り	5	
31	木 与雪	—	—	女	"	昭和44年	蛇谷	30	
32	畑 与吉	64	無職	男	"	大正末	中宮	23	
33	橋 本政	55	—	"	"	大正14年	瀬波	3	

## V あ と が き

### —比較民俗学研究における地域のアニマルロアと動物観の基盤としての環境—

本稿では、白山山麓地帯における居住所間にごく一部ではあったが、今日なおも伝えられているニホンザルという動物への人々の感情、思考の実態の一部を、その野生との出会いとのかかわりあいの中から明らかにしてみたものであり、またニホンザルのすむ他の地域における住民の心にひそむ動物観の歴史的形成過程への追究へと発展していったものである。ニホンザルの生息の様子も、全くことなる農耕の先進的開発であった琵琶湖周辺の住民の一部を対象として、彼等のニホンザルへの関心度を調査して、その実態を、先の白山山麓の場合と比較してみようという試みはようやく1974年にいたって可能となったものである。日本人の野生生物への関心や興味は、土地環境、生産手段、生活様式の違いで著しくことになってくる。とくに個人の受けた家庭、社会、土地環境からの自然や動物への認識はすべての点で、学校および社会教育の影響を強く受けているのである。しかしながら、今回の調査と分析からでは、とうてい日本人全体のニホンザルをめぐる意識が判明したわけではない。それはごく一部の地域における、極めてわずかな人々の動物観の抽出でしかない。しかしながら、ここにはっきりしてきたことは、ニホンザルをめぐる嫌好度合いは、地区による差があるものの、全く半数にわかれて対立するということである。我国におけるアニマル・ロアはこのサルという動物に関してのみこのような特殊な意識があるのであろうか、ヘビやキツネのような他の生き物に対する人々の感情とは、およそことなるものである。とくにニホンザルは、日本人の文化史の中における一つの靈獣であり、大きなモチーフ動物として長く存在してきた過去がある。日本の民族精神史の面からもニホンザルをめぐる動物観と自然観が解明されねばならなくなってきたのであるが、いづれの時代であれ、地域集団の人々の生活意識に入りこむサルという動物の伝承は、地域の住民の心に具体的に密着しない限り、どこからも入りこまないと定着もしないのである。ニホンザルをめぐる動物観の成立の背景を追求するには、まず第一に日本人が地域の自然と野生生物に対し過去から現在までどのような観念を抱きつけてきたかを明らかにしなければならないということが明白となってきたのであり、日本の自然と日本列島にすんだ野生生物の一員であるニホンザルと、彼等の生活とかかわりあった日本人の生活、そして人々の文化意識の中の動物をめぐる諸観念成立の歴史こそ今後とも明らかにされねばならぬ一つの探究課題なのである。

本稿は白山自然保護センター委託研究費をうけ、白山自然保護センター所長、草部博志氏および職員の方々の絶大な御協力をえた。またアンケート調査に協力賜った多くの方々に対してここに深く感謝申しあげる次第である。

(附記) 本稿は昭和49年度石川県白山調査研究委員会研究費による研究成果の一部である。

## 文 献

- |     |   |      |  |                |                  |
|-----|---|------|--|----------------|------------------|
| 道 下 | 淳 | 1971 | 関市春日神社の童子やこうをめぐって                      | 美濃民俗 第49号      | 美濃民俗文化の会         |
| 芳 賀 | 登 | 1974 | 民衆史の創造 p.115                           | NHKブックス        | 日本放送出版協会         |
| 林 勝 | 治 | 1969 | 白山のニホンザル冬の生活                           | モンキー Vol.13(5) | 日本モンキーセンター附属博物館  |
| 林 勝 | 治 | 1970 | 白山周辺におけるニホンザルの生態学的調査「白山の自然」p.344-p.373 |                | 日本自然保護協会<br>中部支部 |
| 広 瀬 | 鎮 | 1970 | 日吉神社とサル p.22-25                        | モンキー Vol.14.4  | 日本モンキーセンター附属博物館  |

- 広瀬 鎮 1970 日本の自然を守る法の基礎 p. 58 野猿 No. 32 日本野猿愛護連盟  
 広瀬 鎮 1971 ハスの台座の上のサル p. 33 モンキー No. 120 日本モンキーセンター附属博物館  
 広瀬 鎮 1972 漢薬とサル p. 33 モンキー 126 日本モンキーセンター附属博物館  
 広瀬 鎮 1973 肉としてのサル p. 34 モンキー No. 130 日本モンキーセンター附属博物館  
 広瀬 鎮 1973 サルの民間伝承美濃民俗 No. 74 美濃民俗文化の会  
 広瀬鎮・水野和子 1974 白山山麓のニホンザルをめぐる狩猟伝承と尾添川流域住民の動物観 p. 21-24 石川県自然保護センター報告 石川県  
 本間 整 1958 お猿とえんぎ 野猿 No. 3 日本野猿愛護連盟  
 市場 直次郎 1973 豊後筑紫路の伝説 p. 48 第一法規  
 飯田 道夫 1973 猿よもやま話 p. 267 評言社  
 伊沢 紘生 1970 白山蛇谷の野生ニホンザル p. 7-13 モンキー No. 116 日本モンキーセンター附属博物館  
 伊沢 紘生 1972 白山蛇谷一円に生息する野生ニホンザルの生態学的調査 p. 6-18 白山資源調査事業 1971年度 石川県  
 景山 春樹 1961 神体山 p. 182 学生社  
 景山 春樹 1972 近江文化財散歩 p. 199-211 学生社  
 川村俊蔵・朝日稔 1972 滋賀県における動物の保護 p. 47-66 滋賀県の自然保護に関する調査報告 滋賀県  
 窪 徳忠 1969 庚申信仰の研究 p. 377 東洋文化研究所  
 民俗資料選集 狩猟習俗 1 p. 18 国土地理協会  
 村山 修一 1957 神仏習合思潮 p. 24 平楽寺書店  
 桜井 徳太郎 1970 日本民間信仰論 p. 203 弘文堂  
 白峰村史資料 1863 白山麓拾八ヶ村留帳 織田利太郎家蔵  
 白峰村史編集委員会 白峰村史上・下 白峰村  
 和歌森 太郎 1972 修験道史研究 p. 60 平凡社

## Summary

In 1973-1974, we examined how people who live in mountain or field feel about monkey when they encountered with wild Japanese monkey, and researches were made with enquete in two regions of Hakusan (Ishikawa Pref.) and The Lake Biwa area (Shiga Pref.).

Trying to disclose characteristics of people's minds how they have been thought on wild monkey with regional interest and values. We could mention three tendencies in the Lake Biwa region.

1. There are some fearful feeling to the monkey, which reduced under regional evaluation to animals, cultivated traditional minds of informants in this district.
2. Almost of people had not too much interests in wild monkey at present time.
3. Infomants could not tell us traditional monkey's medical use.

To make sure the meanings of different regional animal lore, we tried to ask more than 50 persons at the Hakusan district and we obtained interesting answers. The characteristics on the animal feeling on wild Japanese monkey in this district are as follows.

1. There found no strict taboo of inhibition on capturing monkey in Hakusan district.

2. Feeling of people's affinity to wild Japanese monkey is strong nevertheless the inhabitants were once suffered too much from destroy of their crops by Japanese monkeys.
3. Scarcely found religious worship, festival affairs connected with monkey in this district.

Researching on taboo connected with monkey and other livings in nature of Hakusan district, there have not found yet the topics of monkey with God or Buddha. There are the historical changings of animal acknowledgement and historical process of man-monkey relation-ship in each field. So far as to analyse animal lore of monkey, we have to mention the problems of value of animal, made by man, in limited area.

Japanese monkeys are very important animal to know the situation of nature, and it may possible to disclose changing monkey lore with the progression of people's value for monkey and process of worse environment.